# ～和の風～ 町長随想

増澤 善和

## 源氏物語千年紀に寄せて
## 紫式部の通った道（四）

道長との間でこの様に多くの贈答歌があったが式部との関係については、識者の間でも意見が分かれている。古書の中には「紫式部は道長の妾（めかけ）」と書かれたものもあるが、もしこれが事実だったのなら、プライドの高い式部は日誌や歌集の中にこれらの歌を残さなかったと思われる。

式部が生涯慕ったと思われる具平親王への歌一首が残る。

『八重山吹を折りて、ある所にたてまつりたるに、一重（ヒトエ）の花の散り残れるをおこせたまへりけるに（前書）

「おりからを　一重にめづる
　花の色は　薄きを見つつ
　　薄きとも見ず」』

前書きにある〝奉りたるに〟や〝おこせ給へり〟の敬語使いは、式部としてはめずらしい。よほど身分の高い貴人宛と思われるがその貴人は具平親王ではないだろうか。

『八重咲きの山吹の花を、あるお方の所にお贈りしたら、散り残った一重の山吹をお送り頂いたので（前書）

「今の季節の花の美しさを感じさせますこの一重の花の色は、薄くとも美しく、薄いことは少しも気になりません（あなた様のお心を薄いなどとんでもございません）」』

宣孝と結婚し、娘を産み、夫に死なれ、道長の娘彰子中宮の所へ出仕するかどうか迷っていた、そんな時、式部は山吹に歌と消息を添えて親王に贈ったのだろう。具平親王は、天皇家と血縁関係（孫を天皇）を持つことで勢力拡大を進めようとする摂関政治の中心人物道長には、批判的であった。道長は式部にとって父為時・兄惟規・夫宣孝の恩人であった。それに、娘賢子の行末も考えれば、道長の要請に従わざるを得ない心中を書き送ったのだと思う。

この歌の内容や宛先がはっきりしないし、相手の歌や添え書きが全くないのも、親王との関係を表に出したくなかったからと推測したい。

### c．大谷浦と藤原家の関係

紫式部が帰路のコースとして、タコの呼坂・大谷浦を選んだ理由を考えてみたい。

### ア．紀友仲が流された大谷浦

大塩八幡宮の縁起には「仁和三年（八八七）八月三日、中納言紀友仲（後に長谷雄と改名）が謀臣のざん言により、府中の南、大谷の泉島に流罪となる。友仲は無実の罪の晴れることを祈るため、石清水八幡宮を心に勧請して祈り続けた。やがて寛平元年（八八九）宇多天皇の許しを受け京にもどる。翌年、石清水八幡宮を現在の越前市国兼町に勧請して、大塩八幡宮を造営した」とある。

この紀友仲とは、平安前期の文学者で、菅原道真（ミチザネ）の門下生でもあった。この友仲が流された仁和三年は藤原基経（道長の四代前）がはじめて関白になった年で、藤原氏が紀氏などの他氏排斥を盛んに行った年である。これを越前守（カミ）（国司）の時代毎変化から考えてみたい。藤原氏で最初の越前守になったのは藤原乙麻呂（オマロ）（七三八）で、紀友仲が大谷に流された年（八八七）までの百五十年間を、前半七十五年と後半七十五年とに分けてみる。前半では藤原氏十六人が越前守だが、紀氏は一人もいない。後半では藤原氏が五人で、紀氏が三人となる。越前は当時大国で国司希望者も多かったことから、この数の変化は、藤原氏にとって危機を示すものであったのではなかろうか。

紀友仲がどうして冤罪（エンザイ）となったかは不明だが、流罪先に大谷浦が選ばれた理由について考えてみることにする。

越前は都に近いので、身分が高い人で罪の軽い人の近流地となっていた。特に大谷には藤原氏ゆかりの人が多く住んでおり、流罪人紀友仲の見張りと、その人物評価ができる地でもあったからだろう。

### イ．藤原一族と大谷浦

先述の越前守として赴任（フニン）した藤原氏一族は二十一人だが、国府には守（カミ）の下に介（スケ）・掾（ジョウ）・目（サカン）などの位の人達が派遣される。現在の知事を「守」とすれば、あとの位は副知事・出納長・総務部長となろう。「守」以下の人達は家族同伴でもないので道中の荷物も少なくてすみ、若い事務官四～五人を連れての旅となるので、敦賀から大谷までは舟、そして大谷から菅谷峠越で武生到着となる。これらの人達も殆んどが藤原一族だったので、大谷には、世話をする藤原家一族（下流階級）が必要だったであろうと推理する。

さて、先述のように紀友仲は無実の罪を晴らすために、なぜ石清水八幡宮を選んだのだろうか。この八幡宮は貞観二年（八五九・友仲が大谷へ流される三十二年前）に、大分県の宇佐八幡より勧請し建立されたものである。この新設八幡宮の初代神主は、友仲と五～六代遡ったまた従兄になる紀御豊であり、その後代々石清水八幡宮の神主を務める家柄となった。こうみると、友仲が石清水八幡宮に祈ったというより、紀氏あげて赦免運動をしたともいえるようだ。大谷に現存する八幡神社（祭神は石清水・大塩八幡宮と同じ品陀和気命（ホムダワケノミコト））は、天平元年（七二九）創建とあるので、友仲はこのお社に祈ったのであろうし、この姿を見た大谷の藤原一族も好感をもって接したものと考えられる。

ところで大谷に藤原一族がいたということの証拠となる神社が、二つ現存する。

①藤原神社

集落の字「藤の森」の上に鎮座し、住民は藤原権現様と呼ぶ。祭神は藤原氏の祖・鎌足（カマタリ）であるが、この名を持つ社は日本で五社しかない珍しい神社である。

②春日神社

中臣（ナカトミ）氏（鎌足が藤原姓を頂く前の姓）の祖神・天児屋根（アマツコヤネ）命を祭神とし、藤原一族が祖神とした神社である。春日神社は、赤萩に一社、武生に二社と少ないが、芦原の春日神社は平安末期に、藤原国貞が奏聞して奈良の春日大社を勧請したとされる。大谷の春日神社も、いつの時代かに藤原一族の勧請によってできたものであろう。

このように、藤原神社・春日神社の由来や、紀友仲が流罪となった時代背景を考えると、平安中期の式部時代の大谷浦には、藤原一族がいたので式部も大きな関心を持って訪れ、一族からも歓迎されたのではないだろうか。

### ④紫式部余話

### ア．源氏物語のモデル

この物語には私小説的な面は殆どないが、式部自身をモデルにしたと思われるのが「空蝉（ウツセミ）」という女性だろう。

中流家庭出身。美人ではないがたしなみのある人妻。夫は老人。一度は源氏の夜媒を受けるが後は拒み通し、夫の国司赴任に同行して姿を消す。同室だった義理の娘が間違われて夜媒を受けるなど。

では、主人公の光源氏のモデルは誰か。天皇家の直系として具平親王、スーパープレーボーイとしては夫宣孝、はで好きで強引な政治家・歌人としては道長などが考えられるのではないかと思う。

私の教え子の一人である俵万智（口語短歌作者）著の「愛する源氏物語」で、物語中の和歌を口語短歌として再生している。その中で「この時代の男性には二つのタイプがある。一つは、相手が好きであればある程、大胆な行動をとることができず、結ばれる時には合意の上で…。もう一つは、とりあえず自分のものにすれば後は何とかなり、情も湧くはず…。」と分析している。これをもとにして私は前者が具平親王、後者が宣孝、中間が道長にあてはめられるのではないかと思っている。

この時代は後者のような横暴な男性が多く、式部は物語・日記・家（歌）集を通して、この様子を後世に残したのであろう。物語中で紫の上のしみじみとした呟きが印象的である「女程、生き方が窮屈で哀れなものはない」と。

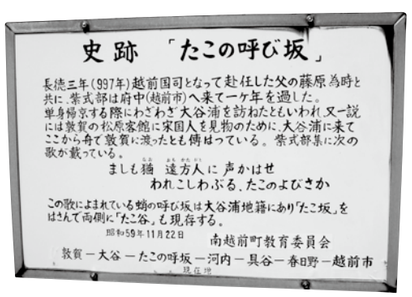
### イ．式部の晩年

寛弘元年（一〇〇四）十二月、式部は三十二歳で中宮彰子に出仕したが、寛弘五年、第一皇子敦成親王（後一条天皇）誕生の直前より書き始めたのが「紫式部日記」である。この日記は、宮中内行事の記録だけでなく、折々の彼女の想いを綴ったものでもある。この日記のキーワードは「身のほど」と「憂きこと」であった。しかし、この日記も寛弘六年の夏頃より殆ど書かれなくなったのは、七月に具平親王が亡くなったからであろう。日記文の所々は手紙文となっており、親王に送るための文であったのだろうか。このあと式部は、全身全霊を打ち込んで源氏物語執筆に没頭し、長和二年（一〇一三）四十一歳の時に物語を完成させ、翌長和三年二月、四十二歳の生涯を閉じたのである。

### ウ．娘賢子の其の後

母式部の亡くなる直前から「越後の弁」の名で宮廷に出仕している。母親の教育もあってか、漢学や和歌などの才能を発揮し、勅撰和歌集に三十七首もとりあげられたり、自分の家（歌）集「大弐三位集」も出している。母親と違って、現実的な処世の才に恵まれて、栄達の人生を歩んだのは父宣孝に似たのであろう。賢子は藤原定頼（「若紫やさぶろう」と式部をからかった歌人大納言公任の嫡子）を恋人とし、その後、関白道兼の息子の兼隆と結婚している。みな名門の貴公子であり、道長を頂点とする花の宮廷生活を物怖じせずに生きたようだ。最後は、大弐三位（今の大臣級）の官職にまで昇任する。式部が亡くなったのは四十二歳、この時賢子は十四歳で出仕しており、式部は娘が自分達両親の良いところを引き継いだ能力があることをかいま見て、大きな期待を寄せると共に、苦労もあったが宣孝と結ばれたことを幸せだったと感じたことであろう。

### ⑤あとがき

「紫式部の通った道」と題しながら、式部の人生の道が中心になってしまった。

武生の本興寺（国府跡）の庭に、娘賢子が母を偲（シノ）んで植えた紅梅があるという。この梅を植えに来た賢子も、タコの呼坂・大谷を母に感謝しながら通ったことであろう。